

愛の万華鏡

高木 徳一



おぼろ月に弱々しい影が二つ、揺れ動く。

ネオン街から離れたこの一角は住宅街で、窓辺の明かりが一つ、また一つと消えてゆく。

「奥様とはけりがついたの、貴方・・・」
「・・・それが・・・」
「どうしたのよ。はつきりおっしゃって」
左巻倫（さまき りん）は冷たい鎖をしつかりと握って横を見る。

油の切れたブランコの上の接続部位から、鈍い金属音が続く。

「慰謝料でもめているんだよ」「それなら、前から言ってるじゃない、土地も家も奥様に差し上げたらと。一人で零から出発しましょうよ」「代々続く家だからそう易々と譲れないな、先祖に申し訳がたたんよ。こちらから離婚を申し込んだから足元をみているんだ」「私は貴方が何時も傍に居て下さるだけで十分よ」「分かっているよ」

ふさふさした黒髪に手を遣りながら、黒瀬善之は倫の大き過ぎる目を見詰める。

「だったら、早くまとめて下さいな。もう二年も待たされているんですから。すつきりして一日も早く貴方を両親に紹介したいのよ」

倫は揺れを止め、両手を離し、黒瀬の肉厚の掌を求めた。

「もう少しだから・・・」「貴方、時間がないわ」「どうして?」

誘導された黒瀬の手が倫のタイトスカートに乗った。

「感じない?」
ギョツとした黒瀬は反射的に倫の手を払い除けた。
「子供が出来たと言うのか?」おどおど声になった。

「ええ、そうよ」「そんな筈はないだろ、ちゃんと避妊をしていたんだから」

黒瀬は極力妻に弱みを見せまいとして、デートの回数も少なくして、尚更セックスは結婚後でも良いと考えていた。倫の一途な情熱に根負けしてし

えた倫の言葉が棘となつて突き刺さつていた。忘れ掛けていた当時の場面が網膜に蘇つた。

秋の東京六大学リーグ戦で、立教大学の四年のエースとして三勝を上げ、あと一勝で連盟の通算最多勝記録を樹立する事となる。次は慶応相手であった。零対零の緊張した投手戦となり、7回裏から小雨がぱらつきだした。8回表に味方の4番米本が豪快な本塁打を打ち、9回裏に一死を取り、3番に初球を投げた瞬間、踏み出した左足が滑り、バランスを崩した。バキツという鈍い音と共に、右肩に激痛が走つた。右腕が上がらず、やばいと思ひ、投手交代を頼んだ。直ぐにタクシーに乗り、御茶ノ水の順天堂大学に駆け込んだ。外来の整形外科で待つ間も痛みは増すばかりであった。呼び出しを受け、問診後にX線、超音波の画像診断がなされ、背骨と肩甲骨を繋ぐ菱形筋が疲労し、断裂を起こしているとの事。時間が経つと筋肉が

萎縮して接合不可能になるので、緊急手術が必要であると、熊のようなごつい顔の医師から告げられた龍太郎の頭の中は梵鐘が鳴り響いた。これでもう巨人入りの夢は叶わないどころか、野球そのものが出来ないと考え、涙が止め処無く流れたのだ。

補欠の小柄な今野選手に両親への電話を依頼し、手術台の上に乗った。

術後、大部屋に運ばれ、瞼を開けると、ガス会社を定年退職した父の鉄太郎と母恵美子の曇り顔が目の前にあった。そこに肩幅の広い大場監督とナインが見舞いに訪れ、勝利したと告げられたが、笑顔の奥は泣いていた。養生しての復帰をと励まされたが、素直に喜べない。球友が去つた後、兄、姉、妹が見え、手術は上手くいったんだと無理に明るい声を出す。

翌朝の新聞では、『立大左巻投手、最多勝記録の金字塔』の見出しが躍っていた。それを目に焼き

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。